

記 入 日 2017年1月12日

1. 概 要

実践団体名	大島町立小学校（つばき小学校・さくら小学校・つつ小学校）		
連絡先	※04992-2-1453		
プランタイトル	大人たちから子どもたちへ、子どもたちから大人へ、今つたえたい事		
プランの対象者※1	3	対象とする 災害種別※2	4

※1 別紙「記入上の留意点」の1. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※2 別紙「記入上の留意点」の2. 項目から1つ選択し、記入してください。

【プランの目的・ここがポイント！】

噴火経験のない子どもたちが、30年前の噴火災害とその教訓や、今後この島で起こり得る火山噴火とその対策の現状について学ぶことによって、自分たちが暮らす火山の島を身近に捉えるとともに、次期噴火までに必要な備えや心構えと、災害発生時に自らの判断で最善の行動を取る「生きる力」を習得することを目的とする。また、子どもの取り組みから大人への伝播をねらいとする。

【プランの概要】

- ①児童が30年前の火山噴火と全島民避難の様子を調査し、当時の経験者にインタビューする。
- ②町の防災対策室や気象庁等の防災関係機関から、避難計画や防災対策について聞き取り調査する。
- ③調査結果を壁新聞にとりまとめる。
- ④噴火30周年シンポジウムや公共施設に壁新聞を展示したり、口頭発表を行う。
- ⑤壁新聞を含めた本プランの報告書を作成し、広く配布する。

【期待される効果・ここがおすすめ！】

- 本プランを通して、子どもたちはもちろん、子どもからインタビューを受ける大人たちや、子どもの発表を聞く大人たちにも、災害と防災・減災への意識向上が図られる。
- 忘れ去られる恐れのある災害教訓を掘り起こし、継承される。
- 学校と防災関係諸機関、および地域住民をつなぐ活動が推進される。

2. プランの年間活動記録 (2016 年)

	プランの 立案と調整	準備活動	実践活動
4 月	各校担当者への説明 と打ち合わせ		
5 月	事前学習会立案		導入学習。事業目標確認。 噴火災害・防災についての学習
6 月		関係諸機関・関係者との 打ち合わせ	聞き取り調査準備、質問項目検討
7 月	聞き取り調査		関係機関調査インタビュー 地域の大人からのインタビュー
8 月			各家庭におけるインタビュー 聞き取り調査まとめ
9 月			聞き取り調査まとめ
10 月		町行事会場における 展示場所の確保	壁新聞作成。発表準備 地域への壁新聞中間展示会
11 月			噴火災害総合防災訓練 校内発表会
12 月		防災学習発表会の練習	噴火防災講演会 発表会
1 月	小冊子作成		
2 月			各地区町役場出張所での壁新聞掲示
3 月			防災教育活動継続会議
随時	各校担当者との打ち 合わせ		

3. 実践したプランの内容と成果

【実践プログラム番号： 1 】※3

タイトル	噴火災害・防災を伝えよう（その1）
実施月日（曜日）	4月18日（月）
実施場所	大島町立さくら小学校
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏 名：山田 三正 所属・役職等：大島町教育委員会
所要時間または「コマ数×単位時間」	45分
プログラムのカテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間
活動目的※5	8 防災意識を高める
達成目標	噴火を知り、噴火防災について伝えようとする意志を確かにする。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	<p>講義</p> <p>①30年前の噴火の様子をDVDで視る。</p> <p>②防災の必要性を説く。</p> <p>③壁新聞を作成し、口頭での説明をすることで島内の防災意識を高めることを確認。</p>
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	30年前の伊豆大島噴火のDVD
参加人数	児童17名 + 担任
経費の総額・内訳概要	資料印刷代
成果と課題	<p>【成果】30年前の噴火について知り、大人に噴火防災を伝えようという想いを、クラス全体で共有できた。</p> <p>【課題】噴火についてより深く知ること。防災についてより広く深く知る必要がある。</p>
成果物	資料



【実践プログラム番号： 2 】※3

タイトル	噴火災害・防災を伝えよう（その1）
実施月日（曜日）	6月29日（水）
実施場所	大島町立つばき小学校
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏 名：山田 三正 所属・役職等：大島町教育委員会
所要時間または「コマ数×単位時間」	45分
プログラムのカテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間
活動目的※5	8 防災意識を高める
達成目標	噴火を知り、噴火防災について伝えようとする意志を確かにする。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	<p>講義</p> <p>①30年前の噴火の様子をDVDで視る。</p> <p>②防災の必要性を説く。</p> <p>③壁新聞を作成し、口頭での説明をすることで島内の防災意識を高めることを確認。</p>
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	30年前の伊豆大島噴火のDVD
参加人数	児童24名 + 担任
経費の総額・内訳概要	資料印刷代
成果と課題	<p>【成果】30年前の噴火について知り、大人に噴火防災を伝えようという想いを、クラス全体で共有できた。</p> <p>【課題】噴火についてより深く知ること。防災についてより広く深く知る必要がある。</p>
成果物	資料



【実践プログラム番号： 3 】※3

タイトル	噴火災害・防災を伝えよう（その1）
実施月日（曜日）	7月5日（火）
実施場所	大島町立つつじ小学校
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏 名：山田 三正 所属・役職等：大島町教育委員会
所要時間または「コマ数×単位時間」	45分
プログラムのカテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間
活動目的※5	8 防災意識を高める
達成目標	噴火を知り、噴火防災について伝えようとする意志を確かにする。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	<p>講義</p> <p>①30年前の噴火の様子をDVDで視る。</p> <p>②防災の必要性を説く。</p> <p>③壁新聞を作成し、口頭での説明をすることで島内の防災意識を高めることを確認。</p>
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	30年前の伊豆大島噴火のDVD
参加人数	児童6名 + 担任
経費の総額・内訳概要	資料印刷代
成果と課題	<p>【成果】30年前の噴火について知り、大人に噴火防災を伝えようという想いを、クラス全体で共有できた。</p> <p>【課題】噴火についてより深く知ること。防災についてより広く深く知る必要がある。</p>
成果物	資料




【実践プログラム番号： 4】※3


タイトル	噴火災害・防災を伝えよう（その2）
実施月日（曜日）	4月25日（月）、7月5日（火）、7月6日（水）
実施場所	大島町立さくら小学校 つつじ小学校 つばき小学校
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏 名：さくら・小齋俊、つつじ・秦佑太、つばき・川崎毅 所属・役職等：教諭
所要時間または「コマ数×単位時間」	45分
プログラムのカテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間
活動目的※5	6 防災に関する知識を深める
達成目標	噴火災害の防災対策について、何を調べ、何を知り、何を伝えるかを考え、全員で共有する。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	<p>講義・演習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後の予定確認 ・各班の調査項目決定 ・班内の係決定（班長、記録係、撮影係） ・インタビューする対象者検討 ・調査・研究開始
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	<ul style="list-style-type: none"> ・講義資料 ・DVD（伊豆大島火山噴火） ・火山（気象庁） ・東京防災（東京都）
参加人数	各校 さくら17名・つつじ6名・つばき24名
経費の総額・内訳概要	印刷費
成果と課題	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・噴火における災害の種類を知った。 ・噴火災害への対応として、観測の強化や色々な努力がなされている事を知った。 <p>【課題】 各調査項目に対する資料整備の充実が課題である。</p>
成果物	資料




【実践プログラム番号： 5 】※3

タイトル	大島町の防災計画を知る	
実施月日（曜日）	5月30日（月）	
実施場所	大島町防災室	
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏 名：高橋 義徳、鶴崎 勝人 所属・役職等：大島町防災対策室室長	
所要時間または 「コマ数×単位時間」	90分	
プログラムの カテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間	
活動目的※5	6 防災に対する知識を深める	
達成目標	大島町の防災体制の現状と課題について知る。	
実践方法・進め方 (箇条書き またはフロー)	講義（大島町役場防災対策室訪問） <ul style="list-style-type: none"> ・町防災体制説明 ・防災グッズ解説 ・大島町噴火災害 ・ハザードマップ説明 	
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	<ul style="list-style-type: none"> ・大島町噴火災害対策要綱 ・ハザードマップ ・防災グッズ 	
参加人数	6名	
経費の総額・内訳概要	特になし（教育委員会スクールバスの使用）	
成果と課題	【成果】 <ul style="list-style-type: none"> ・30年前の噴火時の町の対応と住民の様子を知った。 ・現在の大島町噴火対策について、30年間の変化と現状の課題を知った。 【課題】 <ul style="list-style-type: none"> ・人口減少と高齢化、移動手段の変化などにどのように対応するかを児童に確実に把握させる必要がある。 	
成果物	資料	


【実践プログラム番号： 6 】※3

タイトル	伊豆大島火山そして火山防災対策を知ろう
実施月日（曜日）	5月30日（月）
実施場所	伊豆大島火山博物館
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏 名：平山 康夫 所属・役職等：気象庁伊豆大島火山防災連絡事務所室長
所要時間または「コマ数×単位時間」	90分
プログラムのカテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間
活動目的※5	6 防災に対する知識を深める
達成目標	伊豆大島火山の噴火と火山防災対策についての現状と課題を知る。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	伊豆大島火山博物館訪問 <ul style="list-style-type: none"> ・30年前の噴火の様子と避難状況 ・火山観測網の現状と噴火警戒レベル ・伊豆大島火山の現在の様子について学ぶ 
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	<ul style="list-style-type: none"> ・伊豆大島精密立体模型 ・火山噴出物実物 ・火山～その監視と防災～
参加人数	12名
経費の総額・内訳概要	特になし（大島町教育委員会スクールバス配車）
成果と課題	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伊豆大島火山の噴火の特徴を知った。 ・伊豆大島火山の現状と噴火防災の課題を知った。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・火山博物館において、噴出物や災害の実際を体験したので、当時の経験者の話をもとに避難の実践力を身に付けさせることが課題。
成果物	資料

【実践プログラム番号： 7 】※3

タイトル	30年前の噴火当時の様子を知ろう（地域の人からインタビュー）
実施月日（曜日）	5月30日（月）、9月27日（水）
実施場所	大島町立さくら小学校・つばき小学校・つつじ小学校
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏名：宮本哲夫 時得孝良 岩井満 高野 植松豊 広田弘美 所属・役職等：元町明治会 消防団 所属・役職等：元消防団員 地域住民
所要時間または「コマ数×単位時間」	90分
プログラムのカテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間
活動目的※5	6 防災に関する知識を深める
達成目標	噴火当時の、地域の実態を知る。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	講師来校 <ul style="list-style-type: none"> 事前に準備した質問事項について質問と回答。 インタビューの中で疑問に思ったことなどの質問と回答 
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	<ul style="list-style-type: none"> 講義資料（担当者） 質問事項の資料
参加人数	各校児童
経費の総額・内訳概要	特になし
成果と課題	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 噴火災害における住民の行動と経験から、今自分たちが大人に伝えたいことが把握できた。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 当時の課題や伝承されたことをもとに、現在予想される噴火に対して、いかにまとめ、発表するかが児童の課題となった。
成果物	資料


【実践プログラム番号： 8 】※3

タイトル	防災教育チャレンジプラン中間発表
実施月日（曜日）	10月10日（月）
実施場所	大島町立つばき小学校
担当者または講師	氏 名：山田三正（大島町教育委員会）
所要時間または「コマ数×単位時間」	6時間
プログラムのカテゴリ、形式※4	1 イベント
活動目的※5	8 防災意識を高める
達成目標	児童の10月までの活動を知らしめる
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	<p>町体育行事と並行して体育館にて、取り組み趣旨解説紙と壁新聞の掲示</p> 
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	パネル 壁新聞
参加人数	見学者 多数
経費の総額・内訳概要	印刷費
成果と課題	<p>【成果】防災教育チャレンジプランの途中までの取り組みの様子を知らしめた。</p> <p>【課題】掲示場所の情宣を強化したほうが良い。</p>
成果物	資料


【実践プログラム番号： 9 】※3

タイトル	夏休み中に、家族や近所の人に30年前の様子や噴火防災についてインタビューしよう
実施月日（曜日）	夏休み中
実施場所	各家庭
担当者または講師	氏 名：児童
所要時間または「コマ数×単位時間」	
プログラムのカテゴリ、形式※4	10 家庭学習
活動目的※5	8 防災意識を高める
達成目標	身近な人にインタビューし噴火防災についての知識を高めるとともに、被インタビュー者の意識を高揚する。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	各家庭や知人にインタビューし、まとめる。
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	インタビュー用紙
参加人数	各人
経費の総額・内訳概要	資料印刷
成果と課題	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭内でインタビューすることで、各家族の噴火防災意識が向上した。 ・家庭内で噴火に対する知識が向上した。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・火山防災の資料などを児童が確実に持つてのインタビューが必要かつ有効であることが分かった。
成果物	資料

【実践プログラム番号： 10】※3

タイトル	噴火防災訓練
実施月日（曜日）	11月21日（月）
実施場所	大島町立つばき小学校・さくら小学校・旧差木地小学校
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏 名： 所属・役職等：
所要時間または 「コマ数×単位時間」	90分
プログラムの カテゴリ、形式※4	16 避難・防災訓練（大島町総合防災訓練）
活動目的※5	4 災害を想定した訓練
達成目標	噴火災害の際の地域での避難行動、救助活動などを体験する。
実践方法・進め方 （箇条書き またはフロー）	<ul style="list-style-type: none"> ・大島町防災無線による避難指示発令 ・避難場所への避難完了 ・地域関係諸機関との連携 ・関係諸機関の救助活動など見学・体験 
準備、使用したもの ・人材・道具、材料等	町防災対策室、関係諸機関との連絡
参加人数	各校全校児童 1,000名
経費の総額・内訳概要	特になし
成果と課題	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・噴火災害における行動様式は基本的には他の災害と同じであるが、噴火口の近くでない限り、落ち着いて現状や情報などを把握することで、安全な避難行動が可能であることが実感できた。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・避難場所における児童の避難および救助の援助などを、関係諸機関との連携で確認・充実することが重要である。
成果物	資料


【実践プログラム番号： 11】※3

タイトル	壁新聞を作ろう
実施月日（曜日）	9月1日～11月30日
実施場所	大島町立つばき小学校・さくら小学校・つつじ小学校
担当者または講師	氏 名：川崎毅 秦佑太 小齋俊 所属・役職等：
所要時間または「コマ数×単位時間」	45分×10
プログラムのカテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間
活動目的※5	2 防災に役立つ資料・材料づくり
達成目標	壁新聞作成
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	<p>調査・研究資料のまとめ インタビューのまとめ 写真・資料整理 新聞構成検討・作成 発表方法検討・準備</p> 
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	模造紙 ペンなど
参加人数	各校児童
経費の総額・内訳概要	模造紙、ペン、インク代3万
成果と課題	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 壁新聞の作成 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 各学年における、発達状態を顧慮しての壁新聞づくりを実践することが大切である。 発表機器についての習熟度の差異を把握することが大切である。
成果物	

【実践プログラム番号： 1 2 】※3

タイトル	各校 校内発表会
実施月日（曜日）	12月16日（木）、12月20日（火）
実施場所	大島町立つばき小、さくら小、つつじ小
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏 名：川崎毅 秦佑太 小齋俊 所属・役職等：
所要時間または 「コマ数×単位時間」	90分
プログラムの カテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間
活動目的※5	8 防災意識を高める
達成目標	全校児童、教職員に噴火災害・防災の意識の高揚を図る
実践方法・進め方 （箇条書き またはフロー）	<ul style="list-style-type: none"> ・開会の言葉 ・各班の発表 ・校長先生のお話 
準備、使用したもの ・人材・道具、材料等	壁新聞 PC、プロジェクター、スクリーン
参加人数	各校全校児童、教職員、保護者
経費の総額・内訳概要	特になし
成果と課題	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全校児童と教職員に、噴火という災害が近々に起こりうる可能性があること、災害に対する心構えや対処方法、そして小学生として災害に向き合おうという意識向上が図れた。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝礼や昼集会での設定だったので、保護者の参加が非常に少なかった。
成果物	

【実践プログラム番号： 13】※3

タイトル	伊豆大島火山と火山防災を知ろう
実施月日（曜日）	12月17日（土）
実施場所	大島町開発総合センター
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏 名：岡田弘 所属・役職等：北海道大学名誉教授
所要時間または「コマ数×単位時間」	60分
プログラムのカテゴリ、形式※4	3 講演会
活動目的※5	6 防災に対する知識を深める
達成目標	伊豆大島火山噴火の特徴、防災をより良く知る。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	講演会 1986年伊豆大島噴火30周年 シンポジウム ～火山と共に生きる～ 「次の噴火にどう向き合うか？ 減災例から学ぶ」 
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	PC プロジェクター スクリーン
参加人数	300名
経費の総額・内訳概要	特になし
成果と課題	【成果】 ・専門的見識を科学的なデータをもとに児童にも分かりやすく解説してくれて、より科学的な火山噴火や防災・減災についての認識が深まった。 【課題】 ・会場が大きく、児童がやや注意散漫になることがあった。講演会などについては校内など小規模が有効である。
成果物	資料

【実践プログラム番号： 14】※3

タイトル	壁新聞発表会を行う
実施月日（曜日）	12月17日（土）
実施場所	大島町開発総合センター
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏 名：川崎毅 秦佑太 小齋俊 所属・役職等：
所要時間または 「コマ数×単位時間」	60分
プログラムの カテゴリ、形式※4	4 総合的な学習の時間
活動目的※5	1 イベント
達成目標	島民に対して壁新聞を掲示し、口頭発表し、防災意識を向上させる。
実践方法・進め方 (箇条書き またはフロー)	大島町総合開発センター大集会室 ・3校が順番に発表する。 
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	パネル 壁新聞 PC プロジェクター
参加人数	300人
経費の総額・内訳概要	
成果と課題	【成果】 ・島民に対して、児童からの防災学習の成果を発表した。 ・島民の噴火防災意識を向上させた。 【課題】 ・噴火防災を対象にして学んできた。今後は各種の災害に対する防災・減災について学んでいくことが課題である。
成果物	資料

【実践プログラム番号： 15】※3

タイトル	各地区壁新聞掲示 <予定>
実施月日（曜日）	平成29年1月16日（月）～
実施場所	大島町役場、岡田出張所、波浮出張所
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏 名：山田三正 所属・役職等：大島町教育委員会
所要時間または 「コマ数×単位時間」	
プログラムの カテゴリ、形式※4	1 イベント
活動目的※5	8 防災意識を高める
達成目標	地域住民への防災意識を向上させる。
実践方法・進め方 （箇条書き またはフロー）	大島町役場・出張所に壁新聞を掲示する。
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	各校壁新聞
参加人数	島民
経費の総額・内訳概要	
成果と課題	【成果】 【課題】
成果物	

【実践プログラム番号： 16】※3

タイトル	次年度への継続会議 予定
実施月日（曜日）	2月23日
実施場所	大島町役場会議室
担当者または講師	担当者・講師等の区分： 氏 名：山田三正 所属・役職等：大島町教育委員会
所要時間または 「コマ数×単位時間」	30分
プログラムの カテゴリ、形式※4	17 大島生活指導主任会議
活動目的※5	10 次年度への防災教育継続会議
達成目標	小学校
実践方法・進め方 (箇条書き またはフロー)	生活指導主任会における次年度防災教育推進の依頼と確認
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	大島町小学校・中学校・都立高校各校生活指導主任、 東京都教育庁指導主事、大島町教育委員会
参加人数	12名
経費の総額・内訳概要	特になし
成果と課題	【成果】 ・小中学校の教育課程に防災教育の時間の確保と、高等学校との連携が期待される。 【課題】
成果物	資料

4. 苦勞した点・工夫した点

<p>プランの立案 と調整で 苦勞した点 工夫した点</p>	<p>島内3つの小学校での取り組みであったため、同一機関が3校へ対応する必要がある、インタビューや説明の時間等の調整に手数がかった。</p> <p>各学校の学級単位での指導となり、他の学校行事や町行事と並行しながらの実践であったが、他の学級担任が調整に配慮してくれたとの報告があった。</p> <p>これまで島内での防災教育は「避難行動訓練」が中心となっており、その都度講話の時間を設けて災害に対する知識なども指導していたが、短時間の訓練であった。しかし、本プランを実践するにあたっては、防災教育の時間を確保し、教育課程の中に位置づけての実践を各校の協力で行うことができた。</p> <p>校内発表会を朝礼の時間などに行うことになり、口頭発表について保護者への参加案内が難しかった。しかし、12月のシンポジウムでは、日に発表の機会があり、全島民に向けた発表を行うことができた。</p>
<p>準備活動で 苦勞した点 工夫した点</p>	<p>児童の自主的探究学習の形態を確保することを前提に実践した。そのためには達成目標を担任としっかりと共有し、児童の活動の際に的確なアドバイスができるように資料などの準備をした。</p> <p>噴火災害が30年前の出来事であり、当時の様子を語っていただける人材を探す際に、地域の消防団長や老人会の責任者などと連絡を取り紹介していただいた。また、イベントについて地域への連絡・宣伝など対象と範囲をどこまでにするか、学校ごとに留意した。</p> <p>壁新聞づくりにおいては学年の発達段階を考慮し、まず壁新聞の作り方を国語などの教科指導とも連携して指導した。本取り組みを狭義にとどめず、他教科の指導とも連携することを意識して行うことが、教育課程の実践にも有用であることを担任と確認しながら進めた。</p>
<p>実践に 当たって 苦勞した点 工夫した点</p>	<p>各校の担任の指導計画を優先しての実践を目指した。まず、壁新聞を完成させることを第一目標とした。その後、口頭発表の準備をしたが、当然の結果ではあるが、発表準備の時間確保に担任が苦勞した。しかし、児童が時間を有効に使い、休み時間などを活用し自発的に準備を行っていた。もともと自主的に課題に取り組む姿勢が日頃からできていた結果であるが、よりいっそうの自主性が育まれたと感じた。</p> <p>児童の自主的学習を推進するとき、児童の発達段階に沿った活動を進めると学習目標達成に不十分な事案がでた。児童からの課題が次々に出て、幅も広がることが多く、その際のアドバイスなどについて担任の指導内容の認識度に左右されることがあった。</p>

5. 他の団体、地域との連携

協力・連携先の分類	団体名、組織名	協力・連携の内容
学校・教育関係・ 同窓会組織	大島町立つばき小学校 大島町立さくら小学校 大島町立つつじ小学校 大島町教育委員会教育文化課	防災プログラムの実践 児童による実践 防災学習公開・発表会
保護者・ PTAの組織	小学校PTA	防災訓練参加 発表会参加
地域組織	大島町消防団 元町老人会	講師派遣 講師派遣
国・地方公共団体・ 公共施設	伊豆大島火山防災連絡事務所 大島町防災対策室 伊豆大島ジオパーク推進委員会 環境省伊豆諸島自然保護管事務所	講師派遣 講師派遣 総合防災訓練 自然災害環境学習
企業・ 産業関連の組合等		
ボランティア団体・ NPO法人・NGO等		
職業、職能団体・ 学術組織、学会等	伊豆大島火山博物館	火山学習・噴火災害防災 の学習

6. 成果と課題（実践したプラン全般について）

<p>成果として得たこと</p>	<p>○30年前の噴火災害における災害教訓を掘り起こし、継承できた。また、本取り組みを継続して行う際に活用できる、壁新聞を含む報告書や、口頭発表用のプレゼン資料ができた。</p> <p>○児童が、普段の生活と自然災害の密接さを体感し、災害と防災・減災への意識が向上した。特に災害時の避難所生活において、積極的に果たすべき行動について理解が深まった。</p> <p>○児童が身近な大人や保護者にインタビューすることで、それを受けた大人たちの記憶や意識が高まるとともに、子どもたちの成果発表に関心を持つことで、大人たちの防災・減災意識の向上につながった。</p> <p>○現在の防災体制や対応を、学校や地域住民に浸透させた。</p>
<p>全体の反省・感想・課題</p>	<p>各学校単一学年での取り組みであったが、学校全体での協力も得られ、並行する他行事との兼ね合いもスムーズにいった。学校外の関係諸機関との連絡調整などにおいて、一つの機関が複数の学校と対応することになり、密な連絡調整が重要であったが、関係諸機関との事前の合意形成があったので、十分な協力体制を執ってくれた。</p> <p>本地区における噴火災害は約40年の間隔があり、経験や伝承が時間とともに薄れがちになっていることが改めて確認された。一方で地区内には噴火は必ず起こるものとして、自分の体験や知識などを子供たちに伝える必要があると考えている大人も、多数存在していることも確認された。噴火防災という地域の特有の災害であるからこそ、自らの経験を子どもたちに伝え、島での生活をより安全に過ごす術として伝える場を確保することが継続的に可能になったことは、この取り組みの大きな成果の一つと考える。</p> <p>様々な災害について、科学的に知ることと、現地での経験を直接聞いて、児童自身が学び考える取り組みを継続させることが重要であると改めて実感した。各家庭でのインタビューにおいて、30年前の経験を調査することと、現在の噴火防災についての意識調査も課題にしたが、各家庭での意識の調査があまり集まらなかった。このことは、現在の保護者の噴火に関しての意識の低さを物語るものと分析した。</p>
<p>今後の継続予定</p>	<p>防災教育の重要性を鑑み、次年度から教育委員会の施策として、島内全小中学校において、防災教育を教育課程の重要事項としてこれまで以上に取り組むこととした。</p> <p>各校では教職員の意識と指導力向上を目指し、研修会の計画策定と、防災教育実践への様々な工夫を計画している。</p>

7. 自由記述欄 ※6

災害・防災について子どもたちが「教えてもらう」という受動的な学習段階から、子どもたちが「調べる」、子どもたち同士が「伝え合う」、子どもたちから大人たちへ「発信する」、といった主体的・能動的な行為に発展させることを意識し取り組みを行った。また、大人たちが子どもたちへ伝え、それを受けた子どもたちが大人たちへ発信することによって、防災意識向上の相互作用が起こり、これまで学校内あるいは保護者との間のみで完結していた学校防災学習から、子どもたちが聞き取り調査を行うことによって地域の大人たちとのつながりをつくり、取りまとめた調査結果を島内で広く発信することによって島民全体の防災意識の向上につなげていくという、島内全域への波及効果が期待できる取り組みであった。



授業風景

そして、教職員の災害に対する知識、認識、防災減災への意識の向上も求められ、児童への指導にいっそう自信を持って対応できるようになった。離島で生活するとき、台風や地震に遭遇する場面は必至である。そして、火山災害という火山地域ならではの災害もある。離島に赴任してきた教員には、最初に現地を知ってもらおうとともに、災害についても知ってもらうことが、児童生徒の安全を確保するためにも必要であると改めて確認した。



地域の方のお話

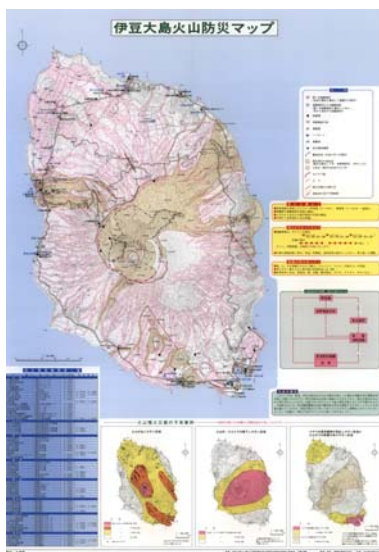
伊豆大島では、近年、中規模噴火が40年弱間隔で繰り返し発生しており、前回噴火からは来年で30年が経過する。噴火災害経験者が高齢化していることから、その災害体験・災害教訓を絶やさず次世代に継承し、子どもたちが噴火災害について知り、火山を身近に捉え、災害時の対応を考える機会をつくることができた。昔から何度も災害を経験している方々が多くいる。普段の校内での交流会と異なり災害の経験と伝承を聞く機会を作ることによって、地域の方も災害に対する経験を子供たちに伝える場ができたとして、とても喜んでくれた。このような交流の場が、地域でのふれあいと助け合いの密度をよりいっそう濃くする一助となった。

遠くない将来に発生し得る次期噴火に対し、子どもたち自らはもちろん、周りの人たちの身を守るために、その備えと適切な判断・安全な避難行動を取るための知恵を習得し、子どもと大人をつなげ、地域で災害教訓を次世代に継承していくための恒常的なしくみづくりとなったといえる。

(自由記述: 1/3)

2013年の伊豆大島土砂災害において、教員自身も避難者となりながら避難運営に携わった経験がある。その際、災害についての防災や対処方法、より深い知識が児童生徒の安全指導に活かされることを実感した。そのためにも、防災教育を児童とともに学ぶことで、教員自身も防災についての理解促進とスキルアップが必要である。その観点からも、専門的な講義を児童と共に学ぶ場とし

ても有効であった。災害について理解し、防災・減災を心がけるためには、災害を科学的に知り対応を考え、実際に訓練し備えることが重要である。教員の指導には限界があり、専門家や経験者からの指導や講話は非常に有効かつ有益である。



火山博物館での学習

火山防災マップや噴火様式についての専門的講習
《講師:気象庁 伊豆大島火山防災連絡事務所長》

地域資源の活用し校外学習で深く学習できた。



地層の観察



火山噴火噴出物

地域の大人の災害に対する意識は、時とともに薄れがちになる。常時、災害のみに気を配っているわけにはいかないが、いざ事が起きたときにはいつでも対応できるようになっていることが望まれる。それには定期的に訓練を行うことが、行政・地域住民ともに大切である。

・夏休み身近な人にインタビュー
・1986年噴火の経験をお話してください。

島の人には互いに助け合いを促して、自然にやっていた。
 ・噴火の時は自然のすごさを感じた。

〇多くの人がスポーツセンターに避難し学校にいきましたが、環境になれなくて学校を休みました。

火口だけでなくどこから噴火するかわからない事をしました。災害の時は色々な情報が飛び交うので何が本当か焦らず落ち着いて判断することが大切。

中3の時噴火を経験して夜中に山頂に登山に行った。学校にいるときに大噴火になり、野増まで歩いて帰った。東京に避難するときは、バスで波浮港いき漁船で元町港に戻り海上保安庁の船に乗って避難した。

避難する前は「さくら株」がもえたとか大島高校まで溶岩が流れてきたとか噂が流れて、大きくなっても大島高校に通えないんだなと思った。

学校に行っている時に三原山が噴火をして大きい地震があり下校の指示があった。祖父が心配だったので家族で集まり一次避難して、その後外避難をした。

〇野増の消防団だった。その日は外輪山の草刈りだったが、空振や噴石が飛んできて中止になった。噴火したら住民を野増小学校に避難させて、危険になり波浮の漁船が大型船に運んで避難させた。自分たちは最後の自衛隊の艦で避難したが、ガソリンスタンドを開けるのに2日後に戻ってきた。

・夏休み身近な人にインタビュー
・児童の感想

経験聞いて大変だったなと感じた。これからの調べに生かしたい。
 ・30年前は生まれていなかったけれど、インタビューをして調べてみて大島中の人が避難するような大変な噴火があったんだと改めて思った。

私はおじいちゃんやおばあちゃんの話聞いて、30年前のその前の噴火まで聞いた。その時は表砂浜が半分以上溶岩で埋まったそう。やっぱり噴火は止めることはできないけれど、噴火だけは船を避難させたいなと思っていて、改めて大島が好きなんだと思いました。授業で情報のことなど調べたいです。

学校の先生は子供を守るけど、村の人たちは消防団婦人会など助け合っている人たちが懐かきりの人を助けたりしていた。普段から助け合うことが大切だと思う。

いろいろな災害があり今も苦しい生活が続いているところもある。噴火があった時は、避難や対処ができるように頑張ろうと思う。

いつ噴火してもいように避難準備しておくことが大切だとおもった。初めて全島避難の事を知って、最初は情報も少なく噂を頼りにして、避難しないといわれ元町にいたことが印象的でした。理由は、最初は野増が危ないから波浮の漁船で救助の船で避難したのに次は波浮が危ないとなって元町に逃げたことと聞いて、今では考えられないほど大変だったと思ったからです。

30年前は生まれていなかったけれど、インタビューをして調べてみて大島中の人が避難するような大変な噴火があったんだと改めて思った。

中間発表掲示物 夏休みの課題 身近な人のインタビュー 児童の感想

【児童の感想から】

- 島の人に一番伝えたいことは、情報を聞き分けることです。デマが回っていたという話を聞いて、正しい情報でないと逆に危ない場所に避難してしまうことがあるからです。
- もしこれから30年前みたいな噴火があったら同じようなことができないかもですが、その時に自分が今できることを考えて人の役に立ちたいです。避難するルールやマナーも全員が考えれば早く安全に避難できるのではと思います。
- 前回の噴火では全島民が避難するほど大変だったんだなと思いました。その時家畜やペットなどをおいていくことになり、消防団の人たちが餌をあげたりしていたのを知りました。今は人口減少でバスを運転する人や消防団の人も減っていて、避難方法を考えなければと思いました。
- 前の噴火から約30年たっているのに、いつ噴火が起きてもおかしくないということでした。噴火についてみんなで協力して島民にいまわかってることを教えたいです。
- 島民全員で協力して、体の不自由な人やお年寄りなどを安全に避難できるように訓練していくことが大切だと思いました。いつ、どこで、何が起こるかわからないのでいつでも避難ができるように準備しておくのがいいと思います。